

『恋廻り』
著：川琴ゆい華
ill：yoco

「……今日って、何年、何月何日？」
スマホを見てもまだどこか信じられないのだ。

「二〇一三年だよ、四月十日」

「二〇一三……」

過去と現実との照合に戸（と）惑（まど）っていると、女の子から「待ってるよ？」とドアのほうを指された。覚えのある展開におそろおそろそちらへ頭を動かす。

「由弦先輩！ 僕さっきから呼んでます～」

明るい笑顔で手を振る絢人が、部室のドアのところに立っていた。大きく胸が跳ねて、脳は忙しく過去の記憶を探る。

大学の入学式から数えて三日目、二〇一三年四月十日。

絢人に「教科書を譲ってほしい」とお願いされたのだ。でもその相手は絢人じゃなくて……。

「教科書を譲ってもらう件で、友だち連れてきました」

絢人は同校出身で、先輩後輩の間柄だ。それほど深い付き合いはなかったけれど、入学式で同じ大学に入ったと知って連絡先を交換しあった。

座っている椅子の脇に紙袋があり、上から覗くと教科書が入っている。一、二年次だけ使うものを三冊。どれも一冊五千円からと高額だ。先輩に譲ってもらったり、中古品を購入する学生は多い。

ドアの向こうには、教科書を譲ってもらうために小田切慧太がいる――ぼんやりしているうちに自然に身体が動いて紙袋の持ち手を掴んで立ち上がった。

過去の自分が、動いているのだ。今の自分の自由になるんじゃないのか、と内心で慌てて（とまれ！）と強く念じると、数歩進んだところでとまった。

完全に今の自分の意思だけで行動できるわけじゃないということなんだろうか。放っておけば過去の出来事をなぞってしまうのかもしれない。

いつまでも動かない由弦に、絢人が目を瞬かせている。タイムリープさせた張本人だ。しかしあそこに立っている彼は、由弦の枕元に現れたときの絢人ではない。二年八カ月前の絢人。

「由弦先輩？」

ドアの前まで行けば、慧太を紹介される。

このままここから逃げ出すか、それとも「教科書は譲れなくなった」と強引に断るか。でもその理由は？ それにこの数日前に譲渡を快（かい）諾（だく）しておいて、問答無用で覆すのはなんとも気分が悪い。逃げたところで急場をしのぐだけ、解決策じゃない。

最初から嫌われるくらい冷たくふるまえばいいと分かっているのに、心が揺れる。教科書くらいでそこまでひどいことをしなくてもいいんじゃないかと思えてくる。

考えがブレると過去の自分に引き摺られ、再び身体が勝手に動き出した。紙袋を手に脚は絢人の方へ向かう。

――とにかく教科書は渡そう。お礼も何もいらぬ。使い終わっていらなくなったら好きにしていから、と。

このあとに起こることを知っているからこそその、状況にそぐわない緊張を漲（みなぎ）らせている。

絢人が横に――慧太がいるはずの方向へ視線を向けて、「ほら」と手招く仕草をした。

心臓がばくばくと鳴っている。

タイプリープしているのが本当だとして、例えば、時空が歪（ゆが）むとか何か不測の事態でぜんぜん別の、慧太がいないパラレルワールドに飛ばされていたりしないだろうか。昔、楽しみに読んでいた少年漫画に、そういうストーリーがあったじゃないか。

まったく知らない世界に来ていたら……ぜんぜん別の人生を歩むことになる？

幾ばくかの恐怖心、この状況をどう受けとめていいのかわからない焦（しょう）燥（そう）感（かん）。自分が本当は何を望んでいるのか、混沌として纏（まと）めきれない。

「教科書を譲ってもらう、慧太」

絢人に腕を引っ張られて、慧太がドアから顔を覗かせた。

慧太の淫色の眸が由弦を捉えて、心臓が潰されそうなくらいにぎゅっと縮こまる。かっとな血が滾（たぎ）り、体温が上昇する。

「……で、こちらが、同じ芸術学科三年の由弦先輩」

絢人の紹介で慧太が「はじめまして」と会釈してきて、由弦もぎこちなく挨拶を返した。

由弦からしたら離れてから二年ぶりに見る、二年八カ月前の慧太だ。決して大きくはないのに引き込ま

れるような目力があり、目元になんともいえない色気が漂っている。すっと通った鼻筋、薄い頬にかたちのいい唇、クールな顔立ちだ。ノリが良くてパッと目を惹（ひ）く分かりやすいイケメンの陰で、複数の女の子たちに目を付けられてモテていたのを思い出す。

慧太と一度目が合ったら、時間がとまったみたいに動けなくなった。彼には不思議な引力があるのだ。見つめ合った刹那に、窓の外で揺れるケヤキの葉や木漏れ日までも彼の立ち姿と一緒に脳裏に焼き付けられた。

どうにか視線を外したら、慧太の服装が目に入った。ロゴ入りのTシャツに太めのデニム、羽（は）織（お）りのシャツを無造作に持った左腕にスポーツタイプの腕時計、肩にはでかいリュック。

—このTシャツ、初めて会った日にも着てたのか。

かあっと耳まで熱くなる。よみがえる記憶には匂いまで付いているようで、思わず息が上がりそうになった。

全身が喘（あえ）いでいる。身体のおちこちがざわつく。好きな人を前にしたときの、どうにもコントロール不能になる状態を久しぶりに実感した。当時は、イイ男だなあ、と思ったただけだったのに、身体のほうが今この瞬間の精神に引っ張られている。

慧太と会わなくなって、恋は終わっていた。うまくいかない部分もあったけれど、仕事に追われる日々でそれなりに生きていた。でもそう思い込もうとして必死だっただけかもしれない。だって実際は、凍結していた感情が瞬時によみがえるような感覚だ。

—好きにならない！

戒（いまし）めを心の中で叫ぶ。なんのためにここへ来たのか。過去を変えるためだ。傷つくと分かっているのに、同じことを繰り返したくない。

慧太を前にして乱れる気分をとにかく落ち着けるためには相当な努力が必要で、由弦はついに完全に俯（うつむ）いてしまった。

「由弦先輩？ 具合悪いんですか？」

絢人に顔を覗き込まれて、ずっと茫（ぼう）然（ぜん）としているわけにもいかず「……いや」とぎこちなく苦笑いする。とにかくタイムリープしているのは事実で、ここで自分は自分をどうにかしなければならぬ。

しょっぱなからこんなで、この先いったいどうなるんだろう。不安しかないのに、もとの世界に帰るにはどうしたらいいのか訊（き）いていない。そもそも帰る手段はあるのだろうか。

「教科書、べつにお金とかいらないから」

当時は「お金はいらぬ」と遠慮したけれど、こんな乱暴な言い方じゃなかった。

慧太は黙ったままで、絢人が「えっ？ でも」と声を上げる。

ぐずぐずしてられずに、慧太じゃなくて絢人に教科書を押つけた。

「とにかくいらぬから」

驚いている絢人と、表情を変えない慧太に背を向けたとき、「あの！」と呼びとめられた。

慧太の声に射（い）貫（ぬ）かれたみたいに動けなくなる。振り向きもせずにややあつて、「何」とぶつきらぼうに返した。

「教科書、ありがとうございます。でも高価なものだからタダってわけには……せめて学食のメシを何回分かくらい」

「いらぬ」

自分でいやな気分になるほど相当かんじが悪い態度だ。普段人当たりのいい対応を目にしている女の子たちも「由弦くん、どうしたんだろ」とこそこそ言い合っている。

でも最初にこれくらいやって繋がりを絶っておかないと。

「由弦先輩、メシくらい奢（おご）らせてやってくださいよ～。慧太めっちゃまじめなんだから、タダで貰（もら）うとかできないよな？」

—そんなこと言われなくたって知ってる。慧太は実直で、素直で、内側に静かな情熱を秘めた男だ。そんなヤツだからこそ、本当は傷つけたくない。

絢人の言葉に後ろ髪を引かれる思いでいると、背後にいたはずの慧太が前に回り込んできたから驚いた。思わず半歩下がり硬直して、慧太の顔に釘付けになる。慧太は「あの……」と何か言いかけて、じっと見つめてきた。

「絢人からあなたの話を聞いていて」

「……話？」

「だから会ったことないのに知ってるっていうか……、あ、そうじゃなくて。顔とかは知らなかったけど、あの……」

なんかキモイこと言ってる、と自分で自分の失言を悔やんでいる慧太は、パッと見のクールさを裏切った表情になっている。由弦も見ちゃいけないものを見てしまった気分ですら戸惑った。

狼（ろう）狽（ばい）した挙げ句に慧太から出た言葉は。

「……あの、一緒にお昼食べませんか」

それを聞いて誰が反応するより早く絢人が嘔き出した。由弦も慧太からのストレートすぎる誘いにぎょっとする。当時は「お礼にランチ」との慧太からの申し出を素直に受けたから、こんなデートのお誘いみたいな恥ずかしい展開ではなかった。

「わはっ、慧太がナンパしてんの初めて見た、ウケルー」

大げさに笑う絢人に振り向いて、「俺の何を話したんだ」と八つ当たりする。

「僕の二個上の先輩で、絵がめっちゃうまくて、綺麗な顔したイケメンで、あとは一……」

「いや、もういい。とにかくお礼はいらないから」

用事があるし、と強引に会話を終わらせて部室前から早足で離れた。約束をする気はないのだし、いつまでもここにいたって「お礼がしたい」「必要ない」の堂々巡りになる。

「由弦先輩ー？」

駆け出すのと同時に、呼びとめようとする絢人の声は聞こえないふりをするしかなかった。

過去を、さっそく少しだけ変えてしまった。この小さな齟（そ）齬（ご）がこのあとにどう影響するのかなんて分からない。

とにかくどうにかして慧太との繋がりを絶たなければ——由弦の頭にあるのはただそれだけだった。

困ったことが起こったのはその翌日だ。課題を提出したら教授に雑用を頼まれてしまい、ひとり遅れて学食でランチタイムのとき。

「……あのっ」

顔を上げると少しばかり頬を紅潮させた慧太が目の前にいた。そしてなんの断りもなくその椅子を引いて座る慧太の動きを目で追うことしかできない。

「教科書、見ました」

咄嗟になんのことも気付いて、いやな予感でいっぱいになった。

盥（しか）め面（つら）の目線をうどんの器に戻して、もくもくと食べる作業を再開する。

「すごいなって思って、あのパラパラ漫画。なんか立体的だったし」

「……………」

失敗した。教科書のお礼、にばかり気を取られていた。

教科書がきっかけというより、その隅に由弦がこつこつと描き込んでいたパラパラ漫画に慧太は興味を持ったらしい。当時も慧太は由弦のその趣味を褒めてくれていたけれど、最初はこういうアプローチじゃなかったのだ。

確認もせず、勢いでまた教科書をそのまま譲ってしまったから——……。

きのうはタイムリープした直後で、そんなところまで気が回らなかったのだから仕方ない。

「教科書三冊、上にも下にもパラパラ漫画が描き込んであって」

「そんなに興奮されるほどのものでもない」

慧太ははっとしたような顔をした。興奮、と表現するにはおおよそほど遠い慧太の声と音量。だけど普段の慧太よりちょっと早口だ。自分には分かる。

「何回も捲ってみました。他にも、ありますか？」

控えめで穏やかな口調なのに、押しが強い。こちらが断ち切ろうとする糸を必死で繋げようとしてくる。でも繋ぐわけにいかない。

普通の人間ならこの辺で折れるし、そもそも自分の趣味に興味を持たれている時点でいやな気分にはならないから「いいよ」と受け入れるだろう。

「ないから。小学生がよくやる遊び、ラクガキだろ」

由弦に冷たく返されて慧太は目に見えてがっかりし、小さく息をついた。これで諦めたかと思いきや、慧太は目の前から動かない。

早くどこかへ行ってくれないか。

「……まだ何かあるの」

目（め）障（ざわ）りだといわんばかりの問いに慧太は一瞬ためらったものの、こちらをじっと見（み）据（す）えてくる。

「もしかして教科書を譲るのが、絢人じゃなかったから？ すぐに『いいよ』って言ってくれたから大丈夫って、絢人から聞いてたんですけど……。絢人は最初から新品買う気だって言ってたし……でも、なんか邪魔とかしてたらすみません」

「邪魔？ って何」

「……絢人だからこそ譲るつもりだったのかな、って。後輩思いの優しい先輩なんだって、かわいがってもらってたって、絢人から聞いてたし」

「……ああ……そういう……」

考えてみればこの頃の慧太は、由弦がゲイだとは知らないのだ。快諾の手のひらを返したせいで絢人に

恋愛感情を抱いていると曲解されたかもなんて慌てて、ちょっと不自然な反応をしてしまったかもしれない。

焦（あせ）りで冷静さを欠いてしまう。

誤解されてでもむしろ嫌われるべきだという考えは、あっけなく吹き飛んでいた。

「その……きのうはちょっと……具合悪かったんだ。変な対応して申し訳なかったなって自分でも……」

取って付けたような嘘は白々しく、歯切れが悪い返しになってしまった。それ以上の追及がなくても、自然と目線が下がる。

「じゃあ、由弦さんの教科書は俺が貰っていいってことで」

いきなりの「由弦さん」呼びに顔を上げた。

「あ、すみません、名字を聞いてなくて。でも……もう、そう呼ばせてください」

慧太は今更許可を取る気はないらしい。

当時も慧太はこんなふうこちらの反応を待たず、または気付いていても知らん顔で、がんがん距離を詰めてきた。経緯は少し違っていても、この辺りは過去をなぞる展開になっている。

—どうしよう。過去を変えたところで、軌道修正されるのか。それじゃあ堂々巡り、過去の繰り返しになってしまうのでは？

「それ、どうぞ食べてください。伸びちゃいます」

うどんを指されて、思い出したように箸を動かす。しかしいっこうに慧太は目の前から消えてくれない。

「……そこにいる気……」

「食後に、アイスとかどうかなって。けっこう暑いですし。やっぱり、お礼くらいさせてください」

「ほんとに……」

いらない、と言いかけて声が萎（しぼ）んだ。きのうはかんじが悪かったというようなお詫（わ）びの言葉を口にしておいてまだ断るなんて、自分が強情で悪者に思えてくる。いや、実際その域だ。それに、たかがアイスくらいを意固地になり、はたして望む結果に導けるのだろうか。

慧太を避けるのが、こんなに苦痛な行為だとは思ってもみなかった。

「教科書、大事に使わせてもらいます。パラパラ漫画も気に入ったし」

言うだけ言って、慧太は目の前でスマホの画面を弄り始めた。まだ食事をしているこっちに気を使っているのかもしれない。

そういえばふたりでいるとき、慧太はほとんどスマホを手に持たなかった。由弦がしばらくスマホを操作しているときですら、じゃあ自分も、とはならなかった。由弦の身体のどこかに触れて、ときどき耳にいたずらをしてくるくらいで。

耳が、じんとする。

「痒（かゆ）くないですか？」

いきなり問われて「え？」と顔を上げる。

「耳、赤いから」

慧太は自分の耳（じ）殻（かく）をさして「この辺」と悪気なく問いかけてくる。「べつに」と短く答えて、うどんを啜（すす）ることに集中した。

早く食べ終わりたい。でもまだかやくおにぎりがひとつ残っている。とてもじゃないけれど慧太を目の前にして、そんな喉に詰まりそうな物を食べる気はうせていた。

「……食べる？ かやくおにぎり」

「え、いいスカ？」

慧太は素直に「いただきます」とそれを右手で掴んで、ひとくちで三分の一ほどに噛みついた。残りもあっという間に。男らしい食べっぷりで指先の米粒まで取ると、「あ……奢る前にまた貰っちゃいました」とまじめな表情で言うからおかしくて、つい頬が緩（ゆる）んでしまう。

慧太は話し方がぶっきらぼうで、喜怒哀楽の表現が控えめで、言葉数もそんなに多くない。

付き合いの浅い人たちから「不機嫌」「冷たそう」と誤解されるのがつねだった。だから慧太が喜んでるとか、照れてるのを見抜けると嬉しかったし、もしかして慧太がそういう表情をうっすらとでも見せているのは自分だけなのかもなんて優越感を抱いたりしていた。

少しだけ笑ってしまった顔を慧太がじっと見つめてくる。

見られているのを意識しながら緩んだ頬を引き締め、でも無視してうどんを啜る。

結局、食べ終わるのを見計らって慧太からカップアイスを出され、諦めて受け取った。これで貸し借りナシになるのはいいけれど、そのまま持ち帰れないので今食べるしかない。

慧太が買ってきたのは抹茶フレーバー。学食に置いてあるカップアイスはバニラとチョコと抹茶で、由弦はいつも抹茶をチョイスしていた。

「あんまり甘すぎるのは苦手だって絢人から聞いて。俺のバニラと交換してもいいですけど」

「……いや、抹茶がいい」

由弦のために抹茶を選んだ理由を告げられてそこは納得できたものの、一緒に食べるのはちょっと……と考えているうちに慧太はもとの場所に座って、自分の分を開封している。プラスチックのスプーンを手に「溶けますよ」と促（うなが）してきて、由弦は複雑な思いで上（うわ）蓋（ぶた）を取った。

—さっさと食べてここを離れよう。

「アウトドアサークルって、キャンプしたりするんですか」

慧太は運動部から熱心な勧誘を受けていて最初は迷っていたものの、結局アウトドアサークルに入る。それを阻止する手立てはあるだろうか。

「海岸のゴミ拾い、体力勝負のボランティア、アルプスに登るとか、東京マラソン参加とか、けっこうきついやつ」

嘘じゃないけれど、アルプスに登るのはごく一部の登山愛好家の人間だ。活動のほとんどはレジャーやスポーツ後の飲み会まで込みで、『健康的な飲みサー』と評されている。

慧太は飲み好きでもなければ、アウトドアではしゃぐタイプでもない。それでも、由弦がいたからという理由だけで入会したのだと、付き合い始めてから聞いた。

「でもそれ、参加する・しないは自由ですよ」

もっともな問いに黙していると、由弦の背後からアウトドアサークルのリーダーが顔を出した。いつの間にかうしろの席にいたらしく、たまたま話を聞いていたようだ。

「もちろん自由だよ。電車で各駅停車の旅、原チャリの旅、ママチャリの会、お散歩会……いろいろある。自分で企画出してもいいしね。それに新歓花見、新歓バーベキュー……四月は新歓活動目白押しだよ。とりあえずサークル活動を体験してみる、ってのもアリ。そのあとで入会するか決めていいから」

『四月、五月の新歓活動スケジュール』と題されたプリントを手渡されて、慧太はじっとそれに見入っている。

「新歓花見……今日なんですね」

「当日の飛び入り参加大歓迎だよ。S214教室がサークルの部室で集合場所。気が向いたらぜひ」

慧太はプリントから由弦に目線を移して何か言いたげにしている。

「由弦も来るよ」

リーダーが勝手に答えたので「えっ？」と驚きの声を上げてそちらへ振り向いた。

「えっ、じゃないよ。当たり前だろ。由弦が新歓花見の幹事なんだから」

当時は、もともとアウトドアサークルに入るつもりで、縋（すが）りに誘われて慧太もついてきたのだ。過去と流れは違っているのに、結果的に同じところへ導かれている。

逃げ道は一本もなく、どうあがいても自分では運命の歯車をとめられないのだろうか。

でも由弦の枕元へ現れた縋人は「真実を探って、過去を変えてしまえばいい」と言ったのだ。変えられるから、こちらの世界へ自分をいざなったのではなかったのか。

—自分の気持ちがブレているから……？

過去の想いが強すぎて、その波に逆らいきれずにいるせいなのかもしれない。

このままじゃいけない。焦るのに、すでに濁（だく）流（りゅう）に足を取られている気がした。

本文 p24～41 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>